

11. 血液培養陽性結果からみえてくる口腔ケアの有効性

- ¹⁾ 獨協医科大学医学部口腔外科学
²⁾ 獨協医科大学病院部看護部
³⁾ 獨協医科大学病院感染制御センター
⁴⁾ 獨協医科大学医学部感染制御・臨床検査医学
 角田尚之¹⁾, 永山敦子¹⁾, 博多研文¹⁾,
 齋藤正浩¹⁾, 栗林伸行¹⁾, 内田大亮¹⁾,
 森川純子²⁾, 浅田道治³⁾, 二戸部富恵²⁾,
 菱沼 昭⁴⁾, 川又 均¹⁾

【緒言】2006年より病院全体で口腔ケアに取り組んでいる。病院の委員会として口腔ケア委員会が設置され、各科医師、口腔外科スタッフ、看護部、事務職が参加し、口腔ケアの最新の概念を理解し、連携のシステムを構築し、各種口腔ケア手技のスキルアップと標準化に取り組んでいる。さらに看護部においても独自の口腔ケア委員会を持ち、リンクナースの養成・認定と共に看護師全員のスキルアップを行っている。このような口腔ケアの取り組みの効果判定の一つとして血液培養の結果に注目し検討した。

【対象】2006年1月から2015年6月までの9年5ヵ月間に当院で実施された血液培養にて陽性となった10,413症例。

【結果】年別陽性率に大きな変動はなかった。菌グループ検出率は腸内細菌が25%、非発酵菌が8%、グラム陽性球菌が49%、嫌気性菌が3%、真菌が4%であった。年別菌グループの推移では、グラム陽性球菌は55%程度から経年的に減少し、近年は30%程度であった。真菌に関しても、5%から経年的に減少し最近では2%であった。各菌グループの検出率と口腔ケア外来初診患者数、口腔ケアリンクナース認定者数の関連を検索すると、口腔ケア外来初診患者数が600名を超え、口腔ケアリンクナース数が150名を超えた2011年頃よりグラム陽性球菌の検出率が低下した。真菌に関しても2013年頃から検出率が低下した。グラム陽性球菌あるいは真菌の検出率と口腔ケア外来初診患者数、あるいは口腔ケアリンクナース数との相関では、ともに非常に低い。負の相関を認めた。

【考察】全体の陽性率に変化がないにも関わらず、口腔の主要常在菌である *Streptococcus* 属を含むグラム陽性球菌、*Candida* 属を含む真菌は減少していた。これは、各科医師の口腔ケアに関する意識の上昇、それによる口腔ケア外来の受診者数の増加、加えて、各病棟での看護師による組織的な口腔ケアへの取り組みが一因となっているものと考えられた。

12. 小児神経性やせ症における認知能力の検討

- ¹⁾ 越谷病院子どものこころ診療センター
²⁾ 越谷病院小児科

大谷良子^{1,2)}, 荒川明里^{1,2)}, 井上 建^{1,2)},
 島村圭一²⁾, 作田亮一¹⁾

【背景】2011年にWISC-IVが出版され、子どもの認知特性をよりの確に捉えられるようになった。神経性やせ症 (Anorexia Nervosa: AN) は体重や体型への認識のゆがみを特徴とする食行動障害であるがANにおけるWISC-IVプロフィールの特徴の報告はない。《目的》AN患児のWISC-IVプロフィールの特徴を明らかにする。

【対象・方法】対象は、2012年1月～2015年9月までに当科初診、DSM-5の基準に従い診断したAN女児22名。栄養改善時にWISC-IVを実施した。本発表に際し、患者・家族のインフォームドコンセントを得た。

【結果】年齢中央値14歳4か月(11歳9か月～15歳11か月)、入院歴あり:17名、併存症:自閉症スペクトラム1名、適応障害3名、初診時肥満度中央値: -35.0% (-47.8～-8.9%)、検査時肥満度中央値: -25.4% (-38.9～18.9%)。WISC-IV全検査IQ (FSIQ) 平均: 101.5±16.1 (69～129)、言語理解指標 (VCI) 平均: 104.1±16.1 (72～133)、知覚推理指標 (PRI) 平均: 97.1±16.5 (71～124)、ワーキングメモリー指標 (WMI) 平均: 97.8±9.1 (88～118)、処理速度指標 (PSI) 平均: 102.6±17.2 (70～132)、初診時肥満度と指標得点、下位検査評価点の相関分析では「処理速度」、「単語」、「符号」で負の相関を認めた。また現在の肥満度との相関分析では「単語」が負の相関を認めた。

【結論】神経性やせ症制限型女児におけるWISC-IVの指標得点、下位検査評価点の平均値を算出した。初診時にやせている患児は単純作業の正確性、迅速性を表す「処理速度」、「符号」が高く、さらに今もやせている患児ほど学習能力や知識量を示す「単語」の評価点が高い傾向にあった。